

楽曲ミニ知識

威風堂々 (Pomp and Circumstance)

『威風堂々』作品 39 は、イギリスの作曲家初代準男爵サー・エドワード・エルガーが作曲した管弦楽のための行進曲集。エルガーが完成させたのは 5 曲であるが、21 世紀初頭に未完の第 6 番が補筆完成されて新たに加えられた。エルガーが生前に作曲、出版した 5 曲のうち、第 1 番から第 4 番は 1901 年から 1907 年にかけて作曲され、第 5 番は晩年の 1930 年に作曲された。遺稿から見つかった第 6 番は未完成であり、アンソニー・ペインによって補筆・完成されたもので知られている。

概要

日本では単に『威風堂々』と言う場合、第 1 番あるいはその中間部の旋律を指すことが多い。しかし、このタイトルは行進曲集全体に与えられた題名であって、この旋律自体に付けられたものではない。したがって、第 1 番の中間部をして『威風堂々』と呼ぶことは誤用に近いものがある。イギリスではこの旋律はもっぱら『希望と栄光の国』 (*Land of Hope and Glory*) と呼ばれている。BBC プロムスなどで第 1 番に合唱を付けて演奏されるときも『希望と栄光の国』として扱われる。

『希望と栄光の国』は「イギリス第 2 の国歌」、「イギリス愛国歌」と称されるほど愛されている曲である。

解説

(^_^) 日本の学校現場では、音楽の教科書(教育芸術社刊小学校 5 年生用など)に、鑑賞曲・器楽合奏曲として収録されています。

第 1 番を聴いた当時の王太子アルバート・エドワード (のちのエドワード 7 世) は、中間部を「歌詞を付けたら偉大な曲になるだろう」と、歌詞をつけるべきことをエルガーに示唆した。エルガーはこの提案を受けて、1902 年のエドワード 7 世の戴冠式のための『戴冠式頌歌』の第 6 番、終曲「希望と栄光の国」にこの中間部の旋律を用いた (導入部「王が戴冠したまわんことを」 ("Crown the King") の最後にも使用している)。歌詞はイギリスの詩人アーサー・クリストファー・ベンソン (英語版) による。エドワード 7 世の虫垂炎により戴冠式が延期されたため、『戴冠式頌歌』の楽譜の刊行と初演が戴冠式の挙行と前後した。楽譜刊行時に世間の好評を得た第 6 番を版元が独立した曲にするようエルガーに提案し、エル



エドワード 7 世の戴冠式で聖別を受ける「古代の諸王の娘」アレクサンドラ王妃。ヴィクトリア女王以来 64 年ぶりに挙行される戴冠式のために「戴冠式頌歌」は作曲された。

(Wikipedia < 戴冠式頌歌 >)

エドワード・エルガー (Edward Elgar)

(1857 年 6 月 2 日 - 1934 年 2 月 23 日) イングランドの作曲家、指揮者。もとは音楽教師でありヴァイオリニストでもあった。

エルガーが遺した楽曲の多くは母国イギリスのみならず、世界中の演奏会で取り上げられている。中でも最もよく知られるのは『エニグマ変奏曲』や行進曲『威風堂々』、ヴァイオリン協奏曲、チェロ協奏曲、2 曲の交響曲などである。また、『ゲロンティアスの夢』をはじめとする合唱作品、室内楽曲や歌曲も作曲した。



(Wikipedia)

ガーが別の曲として書き直し、ベンソンに新たに歌詞をつけさせたものが『希望と栄光の国』である。

現在のイギリスにおいては、国威発揚的な愛国歌かつ第 2 国歌的な扱いを受け、BBC プロムスなどにおける演奏が BBC で放映される際には、歌曲の最初部分においてエリザベス 2 世女王の映像が必ず流されることとなっている。また、『女王陛下万歳』は連合王国国歌として、それとは別のイングランドの独自の国歌の必要性が議論されるとき、イングランド国歌の候補にバリーの『エルサレム』などともに必ず挙げられる曲である。

(Wikipedia < 威風堂々 > より抜粋)

Land of Hope and Glory (1902)

lyrics by A. C. Benson

希望と栄光の国

詞 アーサー・クリストファー・ベンソン

I (Solo)

Dear Land of Hope, thy hope is crowned.
 God make thee mightier yet!
 On Sov'reign brows, beloved, renowned,
 Once more thy crown is set.
 Thine equal laws, by Freedom gained,
 Have ruled thee well and long;
 By Freedom gained, by Truth maintained,
 Thine Empire shall be strong.

愛でるべき希望の国、汝は戴冠せり。
 神は汝を偉大にしたり!
 愛され、偉大なるその君主たる額に
 いまひとたび、汝が冠を戴け。
 自由のよりて得たる、汝の等しき御法よ、
 そは汝を良く、長く続べたり。
 自由により得られし、真実によりて、保たれし、
 汝の帝国は強盛となるべし

II (Chorus)

Land of Hope and Glory,
 Mother of the Free,
 How shall we extol thee,
 Who are born of thee?
 Wider still and wider
 Shall thy bounds be set;
 God, who made thee mighty,
 Make thee mightier yet
 God, who made thee mighty,
 Make thee mightier yet.

希望と栄光の国
 其は自由の母よ
 我らは汝をいかに称えようか?
 我らを産みし汝を。
 広大に、いっそう広大に
 汝の土地はなるべし
 汝を偉大たらしめし者たる神が
 いっそう汝を偉大にしますように
 汝を偉大たらしめし者たる神が
 いっそう汝を偉大にしますように

III (Solo)

Thy fame is ancient as the day
 As Ocean large and wide
 A pride that dares, and heeds not praise,
 A stern and silent pride
 Not that false joy that dreams content
 With what our sires have won;
 The blood a hero sire hath spent
 Still nerves a hero son.

汝の名声は時の如く古く
 海の如く巨大にして広大なり
 恐れず、賞賛も求めぬ誇り
 厳格にして無口な誇り
 父祖が勝ち得たものの夢で満たされる
 偽りの喜びにあらず
 英雄たる父祖の流した血は
 英雄たる息子を元気付ける

(Chorus) *Refrain*

(合唱) くりかえし

単語帳

I

thy /ðai/ = your

crown /kraun/ 冠 王冠 國王にする

thee /ði:/ = you

mighty /máiti/ 権威のある

sovereign /sávəɾən/ 君主

brow /bráu/ 額

renowned /rináund/ 高名な

thine /ðáin/ = your

equal /í:kwəl/ 平等な

law /lɔ:/ 法

gain /géin/ 得る

rule /rú:l/ 支配する

maintain /meintéin/ 維持する

empire /émpaiəɾ/ 帝国

II

extol /ikstóul/ 激賞する

bounds /baunz/ 範囲

be set 位置している、はめ込まれている

III

fame /féim/ 名声

ancient /éinʃənt/ 大昔の

dare /déəɾ/ ものともしない

heed /hí:d/ 心に留める

stern /stəɾn/ 厳格な

content /kəntént/ 満たされている

sire /sáíəɾ/ 父祖

hath /həθ/ = has

nerve /né:ɾv/ …に勇気を与える



エルガーが初めて音楽を学ぶ場となったと語ったウスター大聖堂
(Wikipedia <エドワード・エルガー>より)

威風堂々 第1番

エドワード・エルガー (1857~1934) は、イギリスを代表する作曲家である。小さな楽器店を営みながら教会オルガニストをしていた父親から音楽を学んだ。独力で種々の楽器奏法の習得に励み、楽器店に並ぶ多くの理論書や楽譜を読みあさっていた。15歳で学校を卒業したが、家庭の経済事情からドイツ留学をあきらめている。その後、楽器店を手伝いながら独学を続け、地元で室内楽の演奏活動を行った。20歳でバイオリンを本格的に学ぶものの、結局は技巧派奏者となる夢を果たすことはできなかった。30歳を過ぎて結婚したエルガーは、愛する妻という活力を得てバイオリン教師を生業とするが、1899年にロンドンで初演された「エニグマ変奏曲」が好評を博し、作曲家としてようやく認められる。このときすでに彼は40歳を越えていた。このあとに発表された曲の評判もよく、その名はドイツ、そしてヨーロッパ中に広まった。1900年代前半は、作曲家として最も輝ける時期であり、交響曲第1番はこの頃の作品である。50歳を前にしてナイトに叙され、後年准男爵にも叙されてその栄光をたたえられたが、63歳で夫人が他界すると、喪失感からかその後の創作活動には、あまり見るべきものがないとされている。彼女がエルガーにとって、いかに心のよりどころであったかということが察せられる。

「威風堂々」というタイトルの行進曲は、全部で5曲あるが、第1番がもっとも有名である。当時の国王エドワード7世の心をつかんだトリオの旋律は、その助言により歌詞がつけられ、第二の国歌のように人々に愛されている。曲は躍動感あふれる部分と、題名のとおり堂々とした、聴く者の心を揺り動かすような部分とが繰り返され、やがて、壮大な終結部をもって曲を閉じる。

(教育芸術社 小学校の音楽5指導書)



ウスター近郊にあるエルガーの生家。現在はエルガー生誕地博物館として整備されている。(Wikipedia <エドワード・エルガー>より)